

横浜歌人会 会報 126*

横浜歌人会会報 第126号

目次

●特集>> 第26回研究会

講演会「時代の危機に立ち向かう力～与謝野晶子の場合」

* 02 講演会記録…講師 歌人・歌誌「プチ★モンド」編集発行人 松平盟子氏

●報告>> 2025年度 総会+春の歌会

* 14 「ジャックの塔」の歌会…長崎厚子／うたに繋がる——春の歌会報告…高橋律子
平和を願う短歌絶唱——同感…中村規子

●小特集>> 短歌と出会う

* 16 誘いにのって…西村 曜／終戦八十年に短歌を思う…小河内仁美
たまプラーザキャンパスに、俵万智が来る。…佐藤博之

●essay>> 小田原の北原白秋 —「木^{みみづく}兎^{いへ}の家」

* 18 山本登志枝

* 20 編集後記

特集 第26回研究会

—松平盟子氏講演会「時代の危機に立ち向かう力〜与謝野晶子の場合」—

[講 師] 松平盟子氏（歌人・歌誌「プチ★モンド」編集発行人）
[テーマ] 時代の危機に立ち向かう力〜与謝野晶子の場合
[日 時] 2025年9月27日（土）14:30〜16:30
[会 場] 横浜市開港記念会館（横浜市中区）
[主 催] 横浜歌人会

大沢優子 みなさま、こんにちは。これから横浜歌人会の研究会を開きたいと思います。今年は松平盟子さんにお願ひしまして、「時代の危機に立ち向かう力〜与謝野晶子の場合」というタイトルでお話を伺うことになりました。松平さんは、資料に略歴を載せていただいておりますが、現在「プチ★モンド」という歌誌を出しております。「明星」と同じように様々な論客を招いて幅広い視野をもった雑誌を目指しているらしいです。与謝野晶子は松平さんのライフワークで、明星研究会という勉強会を主宰され、来年で二十年になります。松平さんのお話の後、質疑応答をお受けしたいと思います。では、松平さんお願いいたします。

松平盟子 松平でございます。こんにちは。本当に今日はいいお天気になりましたね。秋晴れといえばこういう日のことをいうのだろーなと思います。ただ

ちよつと暑い。信じがたく暑いような日よりですけども、こうして皆さんと一緒に晶子について語る事ができるのは、とても嬉しいことだと思っております。

今日はですね、大きなタイトルをつけさせていただきました。晶子の歌の魅力、とくに中年期の歌の魅力をご紹介します、その中年期に一方で評論家としてのような仕事をしたのかという流れでお話をしたいと考えています。昨今語られたこの時代の流れは、大正期中頃にあったある一つの出来事、つまり、スペイン風邪の流行がありました。私たちも近年、体験したコロナの感染によって、三年三ヶ月、私たちはマスクを続けてきました。このスペイン風邪で多くの人が死に日本人だけじゃなくて、それが世界をぐるりとめぐって、世界的な規模で感染症が起ったということを見ると、今の時代の危機感と近いのが、その大正中頃

ではなかったのかなと思いました。

■時代に立ち向かう方法

一九一八年（大正七年）、苦難な時代を晶子はどうかとらえ、考えたかをみようといます。一九一八年この年は、スペイン風邪が春に始まったのですけれども、夏になる頃には物価が高騰して、お米が今と同じように根詰まりをして、手に入らなくなつて非常に高くなる。日本人が主食としていたお米を手に入れることができない、そのため米騒動が起こってきます。当時その春からはシベリヤ出兵という、まあ寺内内閣が独断で決めた日本人の兵士をシベリヤに送ることをして、これが結果として戦費をたくさん使うことになりました。また戦争が起ると、お米って値が上がるんで



多くの方に集まっていた講演会

すよ、危機感があつてね。当初は第一次世界大戦の最中でしたから戦争特需で儲けたことは儲けた。お米を輸出して日本は、たくさん売って。それがまた逆に、お米の価格を吊り上げるってことになり、不均衡が一気にこの一九一八年に集中してしまつたのですね。そういう時代を晶子はどうか生きたのか。これまでのイメージだと困難の中でたくさんの歌を詠んで家族のことを思い、心を様々に歌の中に尽くしたのであろうとされるところですけども、この当時の晶子はすでに歌人を越えた存在になつていて、評論家としての存在は確立されていた。これが、晶子が時代に立ち向かう一つの方法、つまり評論活動を通して時代に切り込んでいくという姿勢を見せるようになります。しかし、一方、晶子はやはり歌人なんですね。鋭敏な感受性でものを捉えて歌に詠み、歌人であつて評論家。頭を働かせて評論を書くという、このまったく違う脳の使い方を。右脳左脳その両方をフルに動かして。ある意味ここまで、一人の人間ができるんだなあと思う、驚きをもって。それを受け入れなければならぬほどの仕事をしています。

与謝野晶子は一八七八年（明治十一年）に生まれて一九四二年（昭和十七年）に亡くなつております。六十三年の人生でしたけれども、その中間あたりといいましうか、三十代から四十代あたりが晶子にとつて、『みだれ髪』の頃とはまったく違う中年期の女性の、まあ、様々な揺れ動く状況が描かれている。私はなかなか興味深い頃ではなかったかと考えています。まず十六冊目の歌集『火の鳥』の刊行は一九一九年（大正八年）で四十歳のとき。歌は三十九歳頃のものなのですけれども。その後『太陽と薔薇』は四十二歳、『草の夢』は四十三歳、『流星の道』は四十五歳、『瑠璃光』が四十六歳、『心の遠景』が四十九歳、『満蒙遊

記』は歌文集で、文章も一緒になっているものでして、五十一歳で出しています。満州、蒙古の旅自体は、晶子の四十九歳の頃の旅なんです。ですから五十歳に刊行したとしても、歌としては四十代の終わりですよ。このように見てみると、恐ろしいテンポで歌集を出しております。しかもこれと同じテンポで評論集を出しています。信じられないことだと思いませんか。

晶子の年表には、一九一八年五月二十日評論集『若き友へ』を刊行とあります。一九一九年一月、評論集『心頭雑草』、同じ年八月評論集『激動の中を行く』が出ています。わずか二年の間に評論集を三冊出しています。しかも書いたものを全部収めているのではなくて、実はこの評論集に収めていない溢れた評論がいっぱいあります。今回私が紹介する資料でも、当時の評論集に入っていない溢れた評論も入っています。もちろんこれだけ書いたのは晶子の能力の高さを証明するものですが、当時、与謝野家には子供がたくさんいました。亡くなった子どもを抜いて生きながらえた子どもだけで十一人いますね。しかも、長男光さんは慶応大学医学部ですし、次男秀さんは東京帝国大学。男の子が一人は私立に行きましたけれども、他は帝大なんです。ほんとうに優秀ですね。晶子のお兄さんも東京帝大の工学部の教授でした。あの皆さん、政治家の与謝野馨さんを覚えていらつしやいますか。与謝野夫妻の次男秀さんの息子です。私ね、与謝野馨さんを政治家として見ていた時に、彼は決して自らの地位、立場にしがみつかないタイプの人柄だったかと。同時に非常に数字に強いから、当時は財務省、財務省のトップ、大臣などをなさっていますね。理数系に非常に能力のある人だったようです。

そして、与謝野馨さんが晶子のイメージと重なるんですよ、なんとなくね。晶子は理数系に非常に強い

のです。「明星」という雑誌がともかく百号まで経営できたのは晶子の数理への明敏さのおかげだと私は思います。与謝野夫婦の長男の光さんが書いた随筆の中に、父は芸術至上主義で金銭のことは何もわからなかったと書いています。それを助けたのが母であったと。ま、与謝野鉄幹という人は、確かに理数系は弱かっただろうと思うんです。たとえば彼の生い立ち、状況からして、いわゆる正規の学校に行っていないのです。私的な塾で勉強をし、数学の勉強を全然してない。ただ、非常に直感力があり、瞬発力があり、エディターとしての能力が非常に高い。「明星」などの出版事業を具現化して数字の合うようにもっていったのが晶子だと考えています。経営者としてのセンスは晶子の方が断然高い。私はそう思っています。そういうことを含めてですね、子供たちを男の子は大学に行かせる。当時女の子は大学は私立しかありませんから教育をつけさせようと思うと私立のいいところに行かせようとする。または、師範学校に行かせる。高等教育を受けさせるためにはとつてもたくさんのお金がいります。そのために晶子はたぶん書きまくったんだろうなあという気がしますよね。

今いったとおりに評論活動、ここにあるだけで二年で三冊も出す、恐ろしいことをやっている。それ以外にあることは当然、想像はつきますよね。それだけではなく、後は子供のための童話を何冊も書いています。それから古典の教釈書です。例えば、源氏物語については明治の終わりに、源氏物語五十四巻のダイジェスト版を三巻にまとめて出していますけれども。それを発端としてつぎに一九二三年（大正十二年）に関東大震災で焼いてしまった源氏物語の注釈書、それから昭和に入ってから源氏物語の現代語訳を出していますよね。一九三八年（昭和十三年）から一九三九

年（昭和十四年）にかけての『新新訳源氏物語』。それだけでなく和泉式部の歌集、和泉式部の日記と和泉式部の家集の評釈もしていますね。『蜻蛉日記』、『徒然草』など古典評釈をやっております。目が回る活躍ですね。それ以外に創設した文化学院で教えていましたからね。それから短歌の指南書といわれるようなもの、それを数冊出しております。こういうふうに頭をフル回転しながら、それぞれ同時に仕事をしていた人が、短歌のことは絶対にわすれない人。彼女は歌でもって人生を貫いた人だなということがよくわかります。

■独創的実感と感動

それで、今日お配りはしていませんけれども、お耳に聞いていただければわかる内容ですので、その当時、大正の頃、ちょうど八年頃ですかね。晶子が自分の短歌について書いた文章「晶子歌話」がありまして、それを少しだけご紹介したいと思います。

私が短歌の形式によって自分の実感を表現しようと思ったのは、明治三十一年頃の読売新聞で与謝野の歌を読んだ以来のことです。

与謝野の歌はこれまでの歌に比べると、非常に無造作に作られたようなものでした。これなら自分にも作られないことはなかなうと想われるものでした。

つまり与謝野鉄幹の歌を読んでから、自分が自分の実感を詠む短歌のありようとしてもつとも求めるべきもので、それを教えてくれたのが鉄幹だったということなんです。こんなふうにして、晶子は鉄幹の歌に接

することで自分も作ってみようかなというふうに考えたのですね。

しかるに与謝野の歌はたまたま私を刺激して、歌に対する私の態度を一変させました。

与謝野は、確かに歌における民衆思想の破壊者でした。旧派の歌学に囚われて、その歌学の追従者の間にのみ独占されていた歌を、兎にも角にも一般民衆のために解放して各自の個性の産物であると教えてくれたのは与謝野でした。



自分の夫のことを民衆思想の破壊者といっているんですよね。「旧派の歌学」というのは、つまり、当時の桂園派といわれる香川景樹たちが詠っていた、二条派ともいわれますけれども、旧派の歌ですよね。

ここでいっているのはね、和歌革新を最初に手がけたのは正岡子規じゃないってことです。正岡子規が評論「歌よみに与ふる書」によって近代短歌の開祖であるような書かれ方を、これまでできてきたけれども、晶子からすると、鉄幹の評論「亡国の音」が先にあってその後で出てきたのが正岡子規だということですね。これはね、あの晶子には絶対に譲れない一線なんです。

明治三十三年に与謝野とその友人達とが新詩社を結んで雑誌「明星」を発行するに及んで、歌の積極の開拓者たる与謝野の態度はますます鮮明になりました。与謝野は自身の歌を雑誌の上で発行するのに特に「小生の詩」と題して、内容も形式も古来の型によることなく、ひとえに個人個人の独創的美感に立脚すべきことを主張しました。

独創的美感、これはね、晶子の歌を詠む真髓なんです。独創的であることと同時に、真実、実感を表すこと。晶子の短歌を評するときには浪漫主義の一言で括ることが多いのですが、彼女が求めたのは実感です。しかもそこに「独創的な」と形容がつくんです。独創的な実感、これが自分の目指す歌だと当初から信じていたし、それを貫いてきたというプライドが晶子にはある。

私はこれを見て「歌は我流で作ればよい」という自負と安心とを生じました。そこで早速新詩

社へ加えてもらいました。

その頃、時々刻々、新しいいろいろな感動が内から湧き上がって、それをじっと抑えていることはかなり大きな苦痛であったのです。感動は九天から九地まで激変し、小さな点ほどの事実から、世界の火中に置くやうな狂熱を生じました。身は店の労働に服して忙しく暮らしているなかで、心は源氏物語の貴女にも変形し、人間の暗黒面を透察しては「無」に帰することの平静と、「死」の清浄とを想像して、その陶酔のなかに自殺を実際に図ったのも其頃の事です。

一九〇〇年（明治三十三年）五月から晶子は「明星」の同人となるわけです。彼女は、大阪、堺の和菓子屋の駿河屋のお嬢さんです。十代の頃から源氏物語に非常に心を打たれて、様々な登場人物の思いに寄り添っていたのでしょうか。例えば「浮舟」など。自殺しかけるわけですね、宇治十帖と呼ばれる最後の十巻の中の「浮舟」です。晶子は源氏物語の中に自らの求める世界を発見していった。

ここまで読んだだけでもわかりますが、繰り返し述べているのはやはり感動なんです、感動。それから実感。実感と感動が度々出てきます。晶子にとって歌を詠むということは実感をとらえて、その実感の源にある感動を詠みたい、これが晶子の歌の姿勢の根本にあります。繰り返し述べても、ローマンティックに華やかな歌というふうに晶子の歌を形容してしまうと、ご本人は不本意なんですね。そのような思いで作っているということで、晶子の前半期の歌を読んでみたいと思います。

■晶子四十代の短歌に見る光と影

『火の鳥』とつぎの『太陽と薔薇』は彼女が持っている歌集の中でも最もゴージャスなタイトルですね。しかしタイトルがゴージャスだから歌もゴージャスかどうかはまた別の問題です。むしろ生活苦や様々な苦しみ、悲しみが多ければ多いほど彼女はそうしたものをみじめたらしく表現することを嫌ったところがありますね。

物云へば今も昔も淋しげに見らるる人の抱く火の鳥
『火の鳥』（大正8）

与謝野晶子という人は内面には燃えるような力、炎を持っているけれども、実際に会った人の印象として見ると、無口で言葉も小さな声でモゴモゴモゴと関西弁で話すそうです。あんまり大きな声で語らない。一九二一年（大正十年）から文化学院という私立の学校で教えますけれども、そこで習った生徒さんたちの話によると、前の方に座らないと与謝野先生が何をいっているのかよくわからない、後ろの方に座っていると言葉が聞き取れない。それぐらい小さな声で、こういうマイクなんかない時代ですからね。しかも私みたいに胸を張って偉そうにものをいわないのですよね、晶子という人はね。もっと内省的なところがある人で、一言でいうとシャイな人ですね。それは子供時代からずっとそうですね。面と向かって目を見ながら話すことができないのです、恥ずかしくて。だから顔はちよつとつむいて、目だけは時々パッパツと上に向けて人と話す、それが晶子という人の対面のイメージですよ。親しい人には違うでしょうか、人見知りすると

いうのでしょうかね、そういう人だったのですね。だから鉄幹の歌の中に上目遣いのというふうに書いて、自分の妻なのに。真つすぐ見ないでうつむいて上目遣いになってものをいう。でもそれでももしかしたら、ちよつとチャーミングだったんじゃないかなという気もしたりするのですけれどね。

やはり内向的な人なので寂しうに見えるという、晶子さんは寂しそうですねと、多分、人からいわれることが多かったのではないですかね。だからものをいうと、今も昔も寂しうだねといわれる。だけれども、私の内にあるのは火の鳥、不死鳥なのです。外と中身は違いますよといっているわけね。単純にいうとね。私の内なる火の鳥、不死鳥はずっと私を支えてくれました。そんなことをいっているのでしょう。

自らの重き思ひに^{おぼ}庄へられしらじらと散る心の
薔薇^{さうび} 『火の鳥』(同)

いろいろと物思いにふけることが多い。様々に悩みが多い。だから自分の思いがあまりに多くて、それにだんだんだんと押しつぶされて、そしていつしか散ってしまうのです。私の心の内なる薔薇は、といっているわけです。薔薇はとても華やかで素敵な花だと思っているでしょう、皆さんは。しかし私の心の内にある花は心思いの重さによって、いつしかしらじらと白薔薇のごとく散ってしまうのです。

晶子が薔薇を好きだというのは恐らくは、明治末年にパリに行ったときのこと、ロダンの奥さんから薔薇の花をもらったのを契機と思われまふ。ロダンという芸術家、近代において最も有名な芸術家の一人で、同時に日本において明治半ばぐらいから紹介されていますね。ロダンに対する憧れはイコール、明治の

知識階級の人が皆もっていた憧れなんです。そのロダンに与謝野夫妻はフランスに行ったときに会っています。一九一二年(明治四十五年)六月ですけれども、ロダンに会いたくて、当時、日本人で非常にフランス語が巧みな、松岡曙村さんを通訳として伴いロダンの家に行きます。パリ郊外のムードンまで行きますが、ロダンは不在で奥さんがいらつした、うちの夫は今、パリに実は戻っています。パリにも一つ自分の住まいがあるのですね。パリ郊外のムードンとパリ市内と両方に家があつて行き来していました。現在、パリのちようどセーヌ川のほとりにロダン美術館があります。そこは、ロダンが住んではいたけれど、ロダンの所有物ではなかった。オテル・ピロンという建物だったのです。ロダンはそれを買収する条件として、ロダンの作品を全部国に寄贈することにした。このオテル・ピロンは非常に立派な建物で、今行つても立派です。

晶子たちはムードンでロダン夫人に薔薇の花をたくさんもらう、夫人はもう薔薇も盛りを過ぎて、美しいのをこれでも選んだんですよといつてプレゼントしてくれて、晶子はものすごく感動をします。それからパリに戻つてロダンに会い、ロダンに手の甲にキスをされて、ロダンにキスされた日本人女性はいないね、きつと。晶子はポーツとなつてしまふ。その薔薇の花を本の間に挟んで日本に持ち帰ったんです。押し花にして。それ以来、薔薇の花といつたらロダンとの関わりで晶子はイメージしているに違いなくて、その意味において薔薇というのは単にきれいだな、いい香りだなではなくて、ロダンに直結する花としてとらえているんだろうな、最高の芸術を意味するものではないかなと私は思ふんですよ。

でもそんな薔薇であつても、あまりに憂鬱で、様々

な悩みを抱えていると、心の内の薔薇は散っちゃうんですといっています、わかりますね。

盛りなる桜を見れば春のため凱旋門の立つかとぞ思ふ
『火の鳥』(同)

凱旋門といつたら、これはパリに決まっているわけです。だからパリから帰つてもう八年も経つけれども、やはり心の中にあるのはあのパリの凱旋門、そしてロダンとの対面や様々な芸術的な記憶なんですよ。桜を見て凱旋門をイメージしていくというのが、これまでの日本人にはなかったと思うのです。こういうところがやっぱりあの現場を見た人の強みだなと思つたりもしますよね。

空にして円かに薔薇の咲きめぐる太陽を愛つ恋に
次ぎては 『太陽と薔薇』(大正10)

空に今あるのは真ん丸な薔薇が咲いているような太陽。あの真つ赤な太陽は空にある円かな薔薇なんだ。私はこの太陽がとても好き。でもそれ以上に好きなのは、恋することだ。ここにある恋は単なる男女の恋だけではないような気がします。もつと幅広く物事を愛するということに近いのではないかなという気がしますね。

朝より人の恋しくわが心春の水をむらさきに這ふ
『太陽と薔薇』(同)

春といつても、これは多分、新春のことだろうと思います。朝から人が恋しくてたまらない。ああ、恋しいなと思つていると、私の心はいつしか氷の上を



講演中の松平盟子さん

スーツと這っていく。氷の上に映る自身の影かもしれない。その影を「むらさきに這ふ」という、こんないい方をするわけです。ここにも晶子好みが見え映している。紫を晶子は好きでした。私は晶子の話をするときにはなるべく紫色の服を着ようと思っているのですが、夏向きの紫の服はないから、今日はちよっと近いピンクにしようかなと思って。「わが心春の氷をむらさきに這ふ」ってとてもすてきですね。エレガントな感じもしますね。

こういう歌を四十代の全盛の頃に作るわけですよ。そうするとアララギの人たちは面白くないわけ、はっきりと晶子は書いています。なぜ私が斎藤茂吉さんにこれほど悪くいわれるのでしょうか。

アララギの歌人からすると晶子のような、このような自分を肯定し、明るい色彩を押し出し、そして女性

であることを否定しない姿勢というのはやっぱり何かイライラするでしょうね。しかも晶子は評論を各誌にたくさん書いていた、そのメインだった場所は「太陽」という雑誌。

「太陽」は今の平凡社の「太陽」ではありません。博文館という当時の大きな出版社が出していた雑誌で、オビニオン総合誌です。「太陽」は、時期にもよりますが、まあまあ厚さ。一センチか二センチぐらいで、ちよっと大判なんです。特に盛んな頃には別冊号を次々と出した。もう本当に力のある「太陽」に何かを書かせていただくなんていつたら飛び上がるほどうれしくなる。「太陽」に晶子は一九一五年（大正四年）一月から論壇コーナーをもちます。歌人でそんな人は誰もいません。東京帝国大学医学部を出た斎藤茂吉がらしたら、それはやっぱりなんだかなあでしょうね、恐らくはね。斎藤茂吉だけでなく、いろいろとアララギ系の歌人から中傷を受けたことがあったようですね。だからこそこういう歌を作るのではないかという気もまた一方でいたしますね。

ついでにいうと、アララギで有名だった原阿佐緒、三ヶ島霞子は晶子の元に手紙を送ったり、手紙をもらったりしています。実はアララギ系以外にも晶子との内面的なつながりの強い女流歌人は多く、晶子を通してない、または晶子と交わりを持たない女流歌人はほとんどいなかったと思います、当時。みんな晶子さんに序文、推薦文を求めたことをしていたんですね。そういう立場であったことを理解してください。

悲しくも若さの盡きし身ぞと云ふ今 中天に太陽
は居て
『太陽と薔薇』（同）

晶子はもう二十代の終わりぐらいから、だんだん若さがなくなっていく、もうすぐ老いは私の方にやってくるというような歌を作っております。そんなに恐れることないのにね、老いなんてまだまだと思わないのかなと思うけれど。多分それは子供をたくさん産んで体が疲弊して、生活に疲れ切っているということが晶子をして、ああ、疲れた、ああ、老いたと思わせたのかなという気がします。それでこのような歌、つまり今、太陽が中天にあるということは、もう後は西に行くだけだといっているわけですよ。もう西に沈んでいくだけの太陽、今が私の中天にいる、その最高位であって、もうこれから後は老いていくだけなのではないかと、こういうふうに予感しているということなんです。

つぎの歌集『草の夢』について、私はこの歌集とその後の三冊の歌集はすごく好きなんです。有名な歌が巻頭にあります。

劫初より作りいとなむ殿堂にわれも黄金の釘一つ
打つ
『草の夢』（大正11）

これは有名ですよ。彼の昔より、太古より和歌の殿堂は続いてきた。そこに自分もまた新たな黄金の釘を一つ打つのだという自信と自覚が伺われる。『万葉集』の頃から和歌文学というのがあったわけですよ。ところで、万葉仮名ってとても難しいでしょう。『万葉集』の勉強を少しでもされた方は大変だなときっと思ったと思います。

実は平安時代になると、万葉仮名はすでに読めなくなりました。だから、いわゆる訓古学が発達し、平安朝は『万葉集』研究を一方でしています。平安朝の人たちも、読めなかったのです。

『古今集』と『万葉集』を読解するための訓古学は、同時並行なんですよ。そうやって和歌文学がつながってきた。つなげようというすごい努力があつてつながってきた。私たちは平安朝の頃の、例えば連綿体の字を読めなかったりするでしょう。『古今集』、『新古今集』だつてなかなか、読んですぐ内容がわからないじゃないですか。平安朝の人だつて『万葉集』はよくわからなかったんですよ。でもそれを一生懸命研究します。平安末期になると藤原定家は『源氏物語』を一生懸命書写する。当時の歌人たちは『源氏物語』をどう読むのかをすごく勉強しています。なにしろ、藤原俊成は「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」といつていたほど。注釈書を作つて、それが鎌倉、室町、江戸貴族や武家につながつていった。

江戸時代には『湖月抄』（『源氏物語湖月抄』）を含めた『源氏物語』の注釈書が書かれて、それに導かれて人々は読んだのでした。与謝野晶子が『源氏物語』を読めたのは『古典文学全集』があつたからじゃないのです。『湖月抄』などの注釈書によるものです。

ものすごい努力をしてこれまで和歌文学というのは継承されてきている。だから私たち現代歌人も近代の歌はわからないとかいわないで、読む努力をしないといけないし、自分たちは努力をして今があるということは何がその前にあつたのだろうか、百年前の歌人たちは何を考へていたのだろうか、そういうことを考へつつ今に梯子をかけて、同時にこの先の短歌を詠む人たちに向けて、ちゃんと残すべきものを残す努力をしなければならぬと私はつくづく思うんですよ。

だから「われも黄金の釘一つ打つ」と、この辺りも晶子は威張っているのではない、やつぱりやることをやってきたという思いがあつたのだらうと思います。因みに晶子は話を盛ることは一切ないですね。話をよ

く盛るといい方しますよね。大きく見せようと偉そうにものをいつたりとか、若干フィクションを加えたりとか。晶子という人は全くないですよ。政治家だつた与謝野馨さんを見て、なんだかDNAを感じました。彼女が傲慢しているように見えるように詠んでいるのは、彼女が本気でそう思っているからだと思ひます。そのように努力している人だらうなと思ひます。

君は君われはわれをば忘れずと歎きぬすこしわれを忘れて
『草の夢』（同）

すごく面白い逆説的な歌ですよ。あなたはあなた、私は私を忘れない。それゆえに恋をこれ以上に進めることはできないと嘆きながら、しかし一方で少し我を忘れてあなたのことを思っているんだと詠っています。この屈折。こういう屈折が出てくるのはこの『草の夢』以降です。

椿たたくづれて落ちん一瞬をよろこびとして枝に動かず
『草の夢』（同）

「ご存じのとおり、椿という花は花茎からポツと落ちますよね。その瞬間、終わった、全てが終わつたという感じになりませんか。椿はただ自然に落ちていく。その一瞬を嘆くのではない、その一瞬が訪れるのを喜びとして枝に動かないんですね。逆説的な物言いなのです。この歌のいいところはね。もうこれ以上、人を恋することができないと思うほどまでに恋した果てに、これで散るのだつたら本望だといつていような感じ、これは、有島武郎を心に置いて詠まれたものと私は解釈しています。

当時、有島は非常に人気のある小説家でした、エレガントで、ノーブルで。晶子はノーブルな人が大好きだからね。学習院を出たノーブルな小説家、しかもクリスチャンで、北海道の農地改革をするとか、そういう理想に燃える人なのですよ。英語が非常に堪能、アメリカに留学して。晶子からすると光源氏に近いイメージで受け止めていたのではないかなという気がしますね。

大正期に有島は妻を病気で亡くしていた。子供三人、男の子を残して亡くなります。当時の文学者たちはネットワークが緊密。与謝野夫婦と有島は文学者同士の行き来が始まつて、それが次第次第に恋に発展した。それについて詳しい文章を、私、実は書いています。結構長めの評論です。しかし鉄幹はやつぱりすぐ気づくわけですよ。晶子自身も小さい子供がいますね、やつぱりそれを、いわゆる矩を越えていくことはできないんだとあきらめる。

その後に、有島の心にスツと入つてきたのが女性記者の波多野秋子ですね。それによって彼女の夫から訴えたと脅され、ご存じのとおり有島は心中事件を起こした。軽井沢の有島家の別荘で首を吊つて亡くなる。それがちょうど梅雨時で蒸し暑くなる時季と重なり、もう見るも無残な姿であつたということです。

それを新聞などで報道されて、晶子は非常に衝撃を受けます。それが『瑠璃光』で詠まれているので、読んでみましょう。

君亡くて悲しと云ふを少し越え苦しと云はば人怪しまん
『瑠璃光』（大正14）

あの才能豊かな有島武郎が亡くなつて残念ですが、むしろ、悲しさを越えて苦しいといつているわけで

す。有島との別れを詠った歌は結構あります。ついで九月に今度は関東大震災が起こるわけですね。そのとき晶子は、文化学院という駿河台にある学校に大事なものを置いていました。それは何かというと『源氏物語』の注釈書。ごく最近まで長く現代語訳といわれていたものです。しかしそれが、震災による火事ではばすべての原稿が焼失した。ただ、一枚切り、たまたま何かに挟んであったものから研究した方がいた。それから察するに、現代語訳ではなく注釈書であろうと神野藤昭夫先生が結論づけていますね。現代語訳ではない注釈書のようなものを晶子は作ろうとしていたらしい。ものすごい時間をかけてそれを晶子はやり、「宇治十帖」の手前まで原稿ができていたんです。

休みなく地震して秋の月明にあはれ燃ゆるか東京の街
『瑠璃光』(同)
きはだちて真白きことの哀れなりわが学院の焼跡の灰

関東大震災は、何度も何度も揺れが戻ってきて、そんな中にあつても空を見たら美しい月が皓々と照っていた。その真下では東京の街が燃えているではないかということですね。

この歌を詠んだのはどこかという、元の角川書店があつたところ、多分あの辺りだと思ふんですよ。飯田橋の駅から非常に近い。あそこの川べり、土手がありますよね。東京の都心部が当時、見えただけです。あつちもこつちも火の手が上がっているのが見えて、風向きによってこちらへ来たらどうしようと思ふないながら、そこで一夜を過ごします。怖かったでしょう。晶子はその土手の上からずっと駿河台の方を見ていた。何が心配だったかというと『源氏物語』がどう

なったかと。その後、息子に見に行ってもらったんですね、長男ね。そうしたらもうだめだったということがわかって非常に落胆します。

つぎに、『草の夢』と『瑠璃光』の間の『流星の道』に戻ります。

御空より半はつづく明きみち半はくらき流星の道
『流星の道』(大正13)

流星が流れていくとき、その先端は明るいけれども、尾の方は消えて見えませんよね。虹のようにずっと一直線が続くわけではない。この一首はそのことをいつているのだらうと思います。「半は」あんなに明るく流星が通っていくのが見えるけれども、通つていったと同時にスーッと真つ暗な闇がそこにあるだけで、「半はくらき流星の道」。ここに、自分の人生を重ねているのではないかなという気がしますね。一見華やかに流星は火花を散らすように見えるかもしれないけれども、その後は真つ暗。私が生きてきたこの人生の後半も、辛くて苦しいことが多かったな、こんなふうにいつているように思います。

われの名に太陽を三つ重ねたる親ありしかど淋し
末の日
『流星の道』(同)

晶子の「晶」は太陽の意の日を三つ重ねていると。親がこんな名前をつけてくれたけれどももう四十代も半ば。当時の四十代といったら中年をかなり過ぎていく感じだと思えますよね。しみじみと淋しいな、このような人生の末を意識するような日になってみると。実は晶子の本名は「志よう」という名前です。まさに「シヨウ」の音を水晶の晶に当てた。さらにシヨウは

明るいのアキと読めるので、晶子としたのですね。だから本当は親がつけた名前じゃない、だけれども歌の中ではこのように詠んでいるということです。

つぎの歌、私はこの歌がとても好きです。中年を迎えた人間の寂しさ、うら寂しさを本当によく表しています。

浦島がやうやく老いをさとりたるその日の海の白
波ぞ立つ
『流星の道』(同)

浦島太郎はご存じのとおり、竜宮城から帰ってみたら自分の知らない時代になっていた。誰も知らない人ばかりで、あまりの寂しさに耐えかねて、玉手箱を開けたらおじいさんになっちゃったと。でもここで見ているのは、怖さ知らずであつた浦島太郎も、初めて、ああ、生きるのは怖いことだ、寂しいことだ、辛いことだということを悟つたと。その日と同じように、今、目の前の海は白波が立っているよと、こういつているわけです。これ、名歌だと思うの。そう思いませんか？ 中半を生きる者の空虚さが迫ります。もう一首、さっきの「椿ただくづれて落ちゃん一瞬をよるこびとして枝に動かず」。これもいいな。なんかこう、エロティックなだけだね、そのエロスに嫌らしさがないんですよ。女性として生きてきた最上の喜びを今味わいつつ、もうこの先はどうなるのかわからないという切ない感じがしますね。この二首はとても好きな歌なので、どうしてもご紹介したいと思いました。

つぎは、『心の遠景』ですね。当時は数え年ですから満でない。だからこの「五十路」、五十歳というのも現代の五十歳と違うと思ってくださいね。

身の負はん苦も五十路して儘きぬべしかくおのれ



松平盟子さんの熱い語りの講演

こそ許したりけれ

『心の遠景』（昭和3）

自分は本当にこれまで必死で働き、生きてきた。我が身が背負ってきた苦しみ、これももう五十歳になったら自分の人生のこれからを許したい気分になってきた。もう五十歳を過ぎたら自分のために生きたいと。なんだか悲しくなりますけどね。でも現代であれ当時であれ、五十歳とはそういう人生の生き直しを図るときなのではないかなという気がしますよね。四十代後半から五十代は誰もがご自身の人生を考えていらっしゃるなどと思いますね。当時、平均寿命は五十代か。六十代まではなかったと思うんですね。そういう時代の思いというふうに理解すればよく分かるのかなど。

ことごとく昨日となれば百歳の人もおのれも異ならぬかな
『心の遠景』（同）

もう全てが昨日のことのように思えてくる。五十歳になったばかりとはいえ後だけ生きるかわからない。これまで過ごしてきた日々がみんな昨日のことになると、すべてが終わったという気持ちになります。これは百歳の人も同じなのではないかということなんですよ。なんか寂しい歌ですよ。これはね。

これ以後の歌も、たくさん残っていますけれども、実は晶子は『満蒙遊記』とか『霧島の歌』といった旅行先で仕事としてまとめた歌集以外は一冊も残していない。単独でなくまとめたのは岩波文庫にある『与謝野晶子歌集』と呼ばれるものです。『心の遠景』以降の歌を載せています。

歌集を編集すること以上に、彼女はやはり『源氏物語』に全てを賭けたんですね。五十代で先のような思いを歌にするぐらいだから、いつまで自分の人生があるかわからないという思いが常にあったんですね。彼女の両親は二人とも脳溢血または脳梗塞で亡くなっている。晶子自身も何回か倒れていて、恐らくは高血圧か、脳血栓か、そういうことだろうなと思うんですよね。心臓も弱かったんですね。多分、心房細動もあったのではないかなと思いますね。それで自分の体にそんなに自信がなかった。それゆえに歌集を編むことよりも、『源氏物語』の現代語訳に人生を費やそうと思ったんでしょいうね。

ただ、『満蒙遊記』というのは、結構面白いなと思っていて、与謝野寛とともに満州・蒙古の旅をする。これは国策です。当時、日本は中国に進出するために多くの画家とか、作家など、芥川龍之介もそうですよね、満州・蒙古の旅行をさせて、日本に紹介しました。

晶子は大正時代までは長くフランス派でした。フランス文化が大好き。与謝野家の人たちでフランスと関係のある人も多い。さっきいった鉄幹・晶子の次男与謝野秀さんの娘に与謝野文子さんという詩人がいますけれども、夫は阿部良雄さんという上智大学のボードレールの研究者ですね。与謝野文子さんのフランス語はフランス人が聞いても美しいというフランス語だそうです。つい最近、森鷗外の子孫に当たる方からメールが来たところなんですけれど、この人はフランスに在住。与謝野秀さんの子孫の方たちとご一緒しましたとのことでした。与謝野家の方たちはフランス文化、芸術、あらゆることに通じていますね。

ところが、晶子は関東大震災以降、次第に中国大陆へ関心を深めていきます。

さらに、日本と中国との関わりに踏み込んだ意見を述べるようになりますが、そのきっかけとなったのが蒙古、満州の旅だったんですね。旅の段階では日本と全く違う自然風土に出会って非常に感動するわけです。二首だけ紹介すると、

柏木が煙の如く花咲ける上に重なる渤海の春

『満蒙遊記』（昭和5）

都とは沙漠の空をゆきかへるめでたき雲を見ざる
ところぞ

渤海は八世紀から十世紀にかけて中国東北地方からロシア沿岸にかけてあった国。異国風土を大らかに捉えた歌です。

都というのは所詮、人間が集まっていてザワザワしているだけ。それに比べると沙漠は広い。沙漠の上を渡っていく雲、あの雲は視界の及ぶ限り流れていく。こんな雄大な雲を眺めることができるんだな、と感銘

を受けるわけですね。

以上で、四十代の歌をざっくりですけれどもご紹介させていただきます。

■時代の危機を考える力

晶子の評論に移ります。資料に紹介するとおり、一九一八年当時は、物価高騰、米騒動、スペイン風邪、シベリア出兵という国難が続きました。そういう中であって、晶子がシベリア出兵についてはこんなことを書いています。「何故の出兵か」（『横浜貿易新報』一九一八年三月十七日、『若き友へ』所収）は、こんなことまで書いていいのかなと思うぐらいに、今の時代だったらSNSで取り上げられて炎上するかもしれないという内容です。

私は遺憾ながら或程度の軍備保存は止むを得ないことだと思ひます。国内の秩序を衛るために巡査の必要があるやうに、國際の平和と通商上の利権とを自衛するために國家としては軍備を或程度まで必要とします。之は決して永久のことではなく、列國が同時に軍備を撤廃し得る事情に達する日までの必要に於て變則的に保存されるばかりです。その「或程度」と云ふのも飽迄も「自衛」の範圍を越えないことを意味します。（略）英仏が我國に出兵を強要して、露西亞の反過激派を救援し、少くも莫斯科以東の地を獨逸勢力の東漸から獨立させたい希望のあることは明かですが、

イギリスやアメリカから日本も兵を出せ、シベリアまで兵を出せといわれて日本もその気になって兵を出すといっているわけですね。名目としてはドイツ軍の

捕虜になっているチェコ軍捕虜を助けるという理由だったわけですが、それは単なる名目なんですね。だけれども、

（略）之は日本軍が自衛の範圍を越えて露西亞の護衛兵となるのですから、名義は立派なやうでも断じて応じることの出来ない問題です。露國は露人自身が衛るべきものだと思ひます。（略）この理由から私は出兵に対して飽迄も反対しやうと思つて居ります。

こんなことを堂々と書くのです。なかなか書けませんよ、これって。これに重なる内容、「感冒の床から」（『横浜貿易新報』一九一八年十一月十日、『與謝野晶子評論著作集』（第18巻）所収）には、

（略）複雑した種々の理由からでせうが、足掛五年の間常に六七分の勝味を持つて居た獨逸側が、最近二三ヶ月になつて俄に頽勢を示し、勃土兩國の降伏に次で奧匈國の瓦解、獨逸皇帝の退位要求までに急轉直下したのは意外です。ほんとうに世界は轉動激變の中に在ります。明日の局面はどうなるか、學者にも新聞記者達にも全たく豫測の附かないのが只今の實状です。唯だ狂暴な戰爭の終熄する時が近づいて、平和克復の曙光が見江出したと云ふ事だけは何人にも豫感されます。（ルビは省略）

こんなふうにして第一次世界大戰が終わったのはよかったですけれども、だけれどもというところでシベリア出兵が始まっています。

晶子はこうした情報をどこから得たかですけれど

も、得ていたのは新聞からです。与謝野家は新聞を十紙取っています。今でいうなら朝日、読売、毎日、日経、産経、夕刊フジも含めて十紙を取るんですよ。すごいでしょう。それを全部読むの。いや、読み方が速い、斜めに全部。速読はできるんだろうな。つぎに、これが晶子が考えていることです。

私は特に注意して今度の外國電報を讀まうと思ひます。講和がどう云ふ風にして實現されるか。中歐と近東とに幾つの民主國が建設されるか。民族自決主義と云ふ問題が何處まで事實化されるか。交戦各國の巨大な戦費がどうして整理されるか。戦後に來ると豫定されて居る世界の經濟戰がどう云ふ風に進展するか。永久の平和を保障する國際同盟が果して有効に成立するか。出征の男子に代つて占有した歐米婦人の職業がどの程度まで戦後にも婦人の手に維持されるであらうか。私達婦人が男子と共に注視すべき大問題は續々として發生します。（ルビは省略）

彼女は「外國電報」が大好きで、國際派なんですよ。講和でもって戦争がどのようになるかということを考えるわけです。社会情勢に対して敏感で情報を整理していける、それができたということになりますね。

「戦争に就いての考察」（『六合雜誌』一九一八年四月、『與謝野晶子評論著作集』（第18巻）所収）は、実は四ページにわたる内容の、非常に長いものでして、先ほど読んだ「何故の出兵か」と同じ時期に書かれたものなのです。やはりここでも「何故の出兵か、私は殆どその理由の無いのに感ひます」。結局、日本は兵士を出して何万人もの死者を出し、ものすごい戦費を使い

ながら何ら得るものがなかったんですね。無意味なシベリア出兵だった、結論からいうとね。

『折々の感想』（『早稲田文学』一九一九年四月一日、『激動の中を行く』所収）では、スペイン風邪の第二波について書いています。一九一九年です。当時は「世界風邪」といったのですね、

世界風邪がまた盛り返し、私達夫婦も去年から二度それに罹り、子供もつぎつぎに罹つて、現に今も二人の男の児が寝て居ます。かう云ふ流行病のあるたびに、私は都市の衛生設備の不完全を悲みます。此頃の電車の過度などは人間を詰込んで

病毒を強制的に伝染させる箱のやうな感じがします。あの汚れた吊り皮などがいつ消毒されることか考へてもぞつとします。それよりも恐ろしいのは学校です。幼稚園初め中学、女学校に到るまで、教室に防寒の設備がありません。学校医と云ふものは有名無実で、学校には何の衛生的設備も用意されて居ないのです。（略）併し日本の中学は依然として陸軍式体操を軍国主義の見地から強制し、少年期の男女は寒い教室で凍つた粗食の弁当を食べ、何等の衛生的設備も無い中で教室の掃除を課せられ、さうしていろいろの病気に感染してその病毒を更に家庭に輸入し、幼い弟妹をも病気にして仕舞ひます。之がために子供も両親もどれだけの苦痛と経済上の失費とを重ねて居るか知れません。

これ、すごいでしょう。こういうことを書くことを恐れないのです、この人は。多分、恐れていないんです。彼女が本当に筆の怖さを知って、おびえて書けないと判断するのは昭和の日中戦争からです。彼女は抑

制的になりましたし、むしろ翼賛的になっていきます。これは一体何だったのが今の与謝野晶子研究者の中での一つの研究テーマ。最近、いい論文が一つ出ましたけれども、私もまだ考えている途中です。昭和、日中戦争、満州事変以後ですね。満州事変のときは晶子のみならず、北原白秋ものすごい翼賛的な詩を書いているんですよ。当時の文学者もこぞつてそうだった。社会主義の人たち以外は。それって怖いなと思いますね。この晶子にして、ここまで書いた晶子にしてそうなのか、と思いましたね。それはまた私ももつとしつかりと考えて、結論が出たらお話しする機会もあるうかという気はしております。

■「質疑応答」

大沢 松平さん、貴重なお話をどうもありがとうございます。何かすぐく晶子像がくつきりとして、傍らに立つ人のような気がしてきました。会場からご質問を伺いたいと思いますが、どなたか手を挙げていただけますか、折角ですので。はい、どうぞ。

大塚克行 NPOの日本詩歌句協会の者でございます。まだ勉強し始めたばかりなのですが、日露戦争期の反戦的な歌が、昭和になって違った傾向の歌を詠わざるを得なかったと、抑制的、翼賛的になったといわれましたが、その頃の歌を二、三首教えていただけないでしょうか。

松平 よく知られているのは「わが四郎」、四男の息子に向けて「たけく戦へ」という歌がありますね。つまり勇んで戦えと。「君死にたまふことなかれ」のときは、そういう詠み方はしなかったんですよ。出兵した弟について、ね。死なないで帰ってきてくれと。自分の息子に対しては「たけく戦へ」といつているわ

けです。

大沢 『与謝野晶子の百首』にも「水軍の大尉となりてわが四郎み軍にゆくたけく戦へ」の一首が引かれています。

松平 ほとんど、歌の中で戦争について詠んだものはありません。晩年は病気で寝たきりになっています。いわゆる脳卒中で倒れ、右半身不随になっています。寝たきりで介護されながら最後まで行くしかなかったと。ここまで命が続いただけでもよかったというほどに衰えて亡くなったんですね。一九四二年五月に亡くなりました。

大沢 ほかにいかがですか。はい、どうぞ。

本多 稜 貴重なお話をありがとうございます。与謝野晶子という人間のこの時代を突き抜ける力とか、社会の仕組みを突破する力があると思うのですが、それは与謝野晶子自身が、それを意識してやっていたのか、もう突き進む力で自然とそうなっていたのか、本人が意識していたかどうか、お聞きしたいのですが。

松平 晶子は二十代の頃から、自分の頭で考えるということを自分に課していた。世の中の女性たちはほとんど自分の頭で考えない、もつともつと女たちは頭を働かせて、自分の考えを自分で突き詰めていかなければならないといったようなことを本当に若い頃からいつていますね。最初の評論集、評論集というには雑多なものが入り過ぎていますが、『一隅より』（一九一一年／明治四十四年）にある評論を見ると、自分たち日本の女性たちは急いでもつと勉強して、頭を働かせていかなければならないと、もうしきりに自らを鼓舞し、励まし、前へ、前へと進んでいく、そういう意志を自らに課しているんだなと思いますね。

先ほどもちよつといいましたが、堺時代の晶子は鳳



質問に答える松平盟子さんと司会の大沢優子さん

と書いてホウさんという名字なんです。鳳家は非常に読書環境に恵まれていました。駿河屋は当時としては大きな和菓子屋さんですけれども、晶子のお父さん、そのさらにお母さん、つまり晶子たちのおばあさんの頃から読書好きだったんです。お蔵の中には金銀財宝ではなくて、本が山のように入っている家だったのです。晶子は家の手伝いが終わると蔵に入って本を読むのが何よりも好きだったというふうに、ですから、当時、一般的にいわれる男尊女卑的な発想からすると、女性が本を読むなんて生意気とか、そんなもの必要ないといわれた時代に、鳳家では女性が本を読むことは何ら抵抗がないことだったんですよ。

そういう環境だから晶子自身が本を読むことで自分を高め、内面を耕すというに対して、生まれてから一度も否定されていないのです。当時の多くの女

性、特に昭和になってからでもそうだと思いますけれど、女が本を読むなんてという、読書を禁じられている家庭は結構あったのではないですか。皆さんの時代のご両親あたりだったら、そういう時代を生きていたのではないかなという気がします。でも鳳家はそうではなく、たくさんのお父さんがあつただけでなくて、晶子のお兄さんが東京帝大にいたときから様々な最新の本を送ってくれていた。晶子は読書好きだから家の中に本があるのは当たり前。そこからスタートした人生であつて、自分の頭で考えることが喜びであると発見していった人でもあると思います。

それともう一つ。晶子の結婚後の与謝野家には上田敏、馬場孤蝶、高村光太郎、石川啄木とか、たくさんの方々が常に出入りしていました。軍服姿の森鷗外が来訪したときのエピソードもある。

当時の一般家庭だったら、奥さんはお茶だけ座敷に運んですぐに引込んでしまふような家でしょう。ところが与謝野家はそうじゃない。みんな語り合ひ、世界の話、海外文学の話、様々なことが与謝野家では語られている。そういう環境ですね。だから晶子は、あるところで書いていますけれども、自分は平安朝の女流文学者たちをうらやむことは何らないという、紫式部や清少納言たちが生きていた時代に自分は劣らない環境にいますよ。それについては自分は何ら不満も持ったことはない。そこまですごく切れる女性はいなかったんじゃないかな、ね。晶子が東京に来る前に亡くなった、若干それに近かったのが樋口一葉。樋口家にはいろんな文学者が集まっていたよ。さっきいった馬場孤蝶や斎藤緑雨など、たくさん集まっていたから。

大沢 ご質問をありがとうございます。長い時間にあつた、松平さん、どうもありがとうございました。

「黄木会」のこと

熊沢正一

古い歴史をもつ横浜歌話会が活動を休止したままとなつていて、横浜に実質的な歌人の集まりがないところから、これに代わる作歌上の勉強を中心とした会を作ろうとする動きが前からあつたが、勉強中心の建前として会員数は大体三十名以内、年齢は三、四十代として考えることとし、杉本三木雄（創生）、福田三三男（国民文学）、藤曲豊（樹木）、宮田信次（花実）、吉田宗一郎（同）及び私（アララギ）が発起人となつて呼びかけを行なつた。この結果に基づく懇談会を花実会員の岩崎一平氏（初代相模協会診療所長）宅で昭和三十一年十二月五日に開き、参会者全員の賛成を得た。次いで翌三十二年一月六日、会則等の審議を中心とした懇談会を前記岩崎一平氏宅において開催した。（略）

第一回の研究会は同年二月二日県職員会館で開き十四名が参加し、雨宮熊太郎氏が記念写真を撮ってくれた。以後、杉本三木雄氏のあつた会館、後半に至つて野村良政氏のあつた市職員の会館を中心として毎月開催した。（略）

今回、横浜歌人会の発足に当たり（註・昭和44年4月）、この黄木会はその先駆的役割をなしたともいえないことはないし、黄木会において会員相互が築いた信頼感は、その殆どが横浜歌人会に参加している事実から、必ず本会にも役立つことと信じてやまない。

※「横浜歌人会々報」No.1より

二〇二五年度 総会＋春の歌会

〔日時〕二〇二五年三月十五日（土） 13：15～16：30

〔会場〕横浜市開港記念会館（横浜市中区）

●「ジャックの塔」の歌会 長崎厚子

赤レンガと白い花崗岩の美しい「横浜市開港記念会館」に於いて、三月十五日に横浜歌人会「春の歌会」が開催された。明治末期から大正時代にかけての建築様式を伝え、重厚かつモダンな記念会館は「ジャックの塔」と呼ばれ親しまれている。内部のモザイクタイルやステンドグラスの装飾にも眼を奪われる。歌会は二階七号会議室にて午後二時より。出詠数二十四首、出席者二十人。ユキノ進氏の行き届いた司会により有意義な学びの時間となったことは言うまでもない。まずは参加者の自己紹介から歌会は始まった。鋭敏に季節感を捉えた歌、また日常や心の底を吐露する詠草が並び期待は膨らむ。何首かの出詠歌を抄きながら、会場の活発な評や感想の一端をお伝えしたい。

「うつつらうつつら昼と夜を生きても思ひがけずこの幕間の長さよ」人生の時間のはかなさが巧みに表現されているとの評。〈生ぬるき息わだかまる春晝のホルンの長き休符が續く〉緊張と緩慢を捉えて膨らみのある作品との声。〈ノブ鈍く光りていたり テロルとう声降りやまぬ寒き夕べを〉暴力、破壊、恐怖の危うさを象徴的に切り取り、時代の閉塞感が漂う作品との意見。また次に挙げるのは個性あるオノマトペを配した一首。〈路線図の赤い流れを下りつつどしえんどどしえん運命なんて〉独自の境地が表現されたとの歌評。〈ボ

スターに水着のひとが笑うのを眺めていればチャールズがくる〉ノスタルジーあふれるこの作は良き時代を思い出させると共感を得た。最後にことばの幹旋に優れていて、読者を惹きつける一首を紹介する。〈坂の上の音楽堂に聴くオペラ アメリカが壊れてゆく春の〉。

「歌の話を知りたい、歌を愛する人と繋がりたい」。このシンプルなお願いが十分に満たされた午後であった。あいにくの雨となったが、春本番の近いことを感じながら会場を後にした。

●うたに繋がる——春の歌会報告 高橋律子

まだ肌寒い三月十五日、横浜歌人会の総会、歌会、懇親会が開催されました。横浜市開港記念会館という歴史の重みと荘厳な建物にて、緊張と期待をもって始まりました。初めて参加する方々もいて、希望のある始まりでした。

総会は、議案に皆が拍手で同意し、和やかに進みました。

歌会は、二十名が参加しました。一首について、二名の発言を、とのことでしたが、話が盛り上がり、いろいろな方々が挙手して意見を言い、大変熱心で勉強になりました。詠草の内容はレベルが高く、見識をひろげるよい機会となりました。歌会の参加者は、神谷由希、佐藤博之、小河内仁美、大橋弘、山本登志枝、

濱松哲朗、長崎厚子、西村曜、中村規子、福島泰樹、高橋律子、綿貫昭三、大沢優子、高橋みずほ、須田寛、長沼通郎、吉野裕之、清水あかね、桜井健司、ユキノ進の二十名。

続いて、福島泰樹氏のミニ絶叫朗読会、短くはありましたが、言葉を発表することで伝わるのが大きいとよくわかり、感動的でした。

懇親会は、中華街の荔香亭にて上品な中華料理を味わいながら歓談しました。歌集出版時の話や、日常生活等多岐にわたるお喋りも大変興味深く、短歌を学ぶことで、繋がる仲間の一人になったような感覚をもちました。

拙い私の短歌も、平凡な日常詠を提出した感覚でしたが、フランス映画のようで、幾何学的な感じもする、楽しさ、構成された華やかな景色がある、言葉の取り合わせがたのしいなど、熱心に講評して頂き、短歌の奥深さと懐の深さ、学ぶ楽しさを持ちました。一人で勉強するのでは味わえない良さを歌人会に感じ、実り



横浜市開港記念会館では初めての歌会

の多いひとときに感謝しています。

●平和を願う短歌絶唱——同感

中村規子

三月十五日、横浜開港記念会館にて、横浜歌人会の総会、春の歌会があった。この会場は初めての会場で、みなとみらい線日本大通り駅で下車し、一番出口を出ると広い道路の向こうに見える風格のある建物である。初めて建物の中に入れて嬉しかった。総会は一時十五分から、まず資料が配られた。進行は副代表委員の吉野裕之氏、議長は代表委員の桜井健司に決まる。二〇二四年度事業報告、決算報告及び監査報告、二〇二五年度事業計画案、収支予算案を副代表委員の高橋みずほ氏、運営委員（会計担当）の大橋弘氏が行った。次に森藍火氏が監事を退任するためにこの日から来年の総会まで山本登志枝氏、渡辺礼比子氏が監事になった。

歌会は、二時から今年も票を入れない形式で、ユキ



福島泰樹さんの「ミニ絶叫朗読会」

ノ進氏の司会、長方形に並んでいる前方の左右一人ずつ、詠草番号順に意見を言った。又ユキノ氏の指名で発言したり、本人が積極的に発言することもあり、充実した歌会になった。福島泰樹氏が前の席にいて意見を言つて下さった。特にユキノ氏の歌、

坂の上の音楽堂に聴くオペラ アメリカが壊れて

ゆく春の

について、トランプ氏によってアメリカが壊れていくという福島氏の発言に私は衝撃を受けた。今のトランプ氏のやり方だと本当に不安があり、日本の未来も心配でたまらなくなった。横浜歌人会の会員に加え、会員外の参加者も詠草を出し（二十四名）、歌会に出席したのが、神谷由希、佐藤博之、小河内仁美、大橋弘、山本登志枝、濱松哲朗、長崎厚子、西村曜、中村規子、福島泰樹、高橋律子、綿貫昭三、大沢優子、高橋みずほ、須田覚、長沼通郎、吉野裕之、清水あかね、桜井健司、ユキノ進の二十名である。歌会の後、テーブルを片付け椅子を並べて腰かけ、福島氏の短歌絶唱をきいた。第二次世界大戦をテーマにした作品の絶唱「父を返せ 母を返せ 子供を返せ」は、心にしみた。平和を願う人類の思いを代表するものであった。

一詠 草——二十首（出席者分のみ）

・うつらうつら昼と夜を生きて思ひがけずこの幕間の長さよ
神谷由希
・生ぬるき息わだかまる春晝のホルンの長き休符が續く
佐藤博之
・狭霧なる運河にかかるいく橋を渡りてゆけば明けてゆく空
小河内仁美
・目的というものがなぜ生じるか教えてくれるたまごを割れば
大橋弘

・夕闇のなかくれなみのシクラメンひとつ命が燃え上がりたり
山本登志枝
・ゆりかもめ、鳥の名で呼ぶ列車から墨色の羽根ときをり抜ける
濱松哲朗
・夜の灯を消したる刹那おもひ出づ臘梅の香は祖母のにおひ
長崎厚子
・クロワッサンこぼれやまない生と死の死のほうだけが選べるなんて
西村曜
・ブルーベリーの紅葉遅し新年の光浴びつつ葉を落しをり
中村規子
・ノブ鈍く光りていたり テロルとう声降りやまぬ寒き夕べを
福島泰樹
・花芽まだ堅きが春はもうすぐと色とりどりの水玉オーバー
高橋律子
・園児らのさあさあ遊ぶ姿見て風にあらがふ若菜かと思ふ
綿貫昭三
・身のうちに少年の音色も棲むやうな少女の吹きぬるクラリネットは
大沢優子
・考えることを覚える子の頭出目金しつぽやわらかくゆれ
高橋みずほ
・路線図の赤い流れを下りつつどしえんどしえん運命なんて
須田 覚
・ポスターに水着のひとが笑うのを眺めていればチャーハンがくる
長沼通郎
・チューリップの芽が出てこないことをいい兔のようにbookのように
吉野裕之
・青い表紙のわたしの歌集もそのひとつ
国会図書館
に残す爪あと
清水あかね
・この歌集めくりてゆけば現れるいつものページのいつもの折れ目
桜井健司
・坂の上の音楽堂に聴くオペラ アメリカが壊れてゆく春の
ユキノ進

●小特集 短歌と出会う——初めて短歌を目にしたとき、初めて短歌を作ったとき。

誘いにつて

西村 曜

就職先が決まらないまま大学を出て、いわゆる「ひきこもり」になった。在学時に就活はしたものの、そのストレスで心身も壊した。精神科の主治医から、昼間に外へ出てみては、図書館ならお金もかからないしおススメだよ、と言われたことをうつすらおぼえている。小説を読むのはすきだった。けれどどうして詩歌の書棚を見てみる気になったのかはいまもってわからない。

さあここであなたは海になりなさい 鞆は持つて
いてあげるから

笹井宏之『えーえんとくちから』

現在手元にあるのは文庫版だが、はじめて読んだ『えーえんとくちから』はPARCO出版の布張りの装丁のものだった。その造本がめずらしくて手に取ったのかもしれない。そのときは短歌も、それらが集められた本を歌集と呼ぶことにも馴染みがなかった。本歌集に収録されている短歌もさっぱりわからなかったけれど、わからないまま繰り返し読んだ。この海の歌がくつきりと印象的で、そのうち諳んじられるようになった。あらためて読んでもけっこう面白い歌だ。いきなりこちらに向かって奇妙な提案を仕掛けてくる。下句は気を利かせてくれているようだが、その気遣いがますますこわい。「鞆」というのはこの社会に、世界にわたしを立たしめている重りのようなものではないのか。その重りをこの奇妙な提案者に預けてしまったら、もう後戻りはできない。それでも「海になりなさい」という誘いはじつに蠱惑的だ。当時のわたしも

この歌を折に触れてころのなかで唱えては、もう元には戻れない恐ろしさと、抗いがたい陶酔に浸っていたのだろう。『えーえんとくちから』を借り直しては読み、暗唱できる歌も増えていくなか、わたしはほんとうに後には引けない、ある恐ろしくも魅力的な思い付きに至ってしまった。「わたしにも、短歌は作れるんじゃないか」。

この国のすべての在来線の席きみの居場所はいくらでもある
西村 曜

わたしのはじめて詠んだ歌はこれだったと記憶している。ひきこもっていたわたしが、もっとも言ってほしかったことを歌にしたのだ。『えーえんとくちから』の誘いにつて、わたしは短歌を始めてしまった。やはりもう後には引けないだろう。

終戦八十年に短歌を思う

小河内仁美

私が短歌を初めて自発的に歌ったとき、私は両親と九州の旅に来ていた。あれから凡そ二十年。歌は思うように上手くなっていないが、上手くないから真実であるという歌もあるだろう。この時の歌はそういう意味で、このテーマを頂いた機会にここに書き留めておこうと思う。

太刀洗駅舎ホームの階段に母の悲しみは今も残れり
小河内仁美

現在、町立として二〇〇九年に建てられた太刀洗平和記念館の前身で、旧駅舎（木造平屋建）にあった私設の平和記念館（現在は太刀洗レトロステーション）を私達は訪れ、そこで特攻隊員の遺書を読み遺品に接し、館長さんから九七式戦闘機の実物展示に至った経緯など伺い、それから当時のままの階段（その先に地下通路が在る）を訪ねたのだ。

太平洋戦争時、この地で特攻訓練中の息子をはるばる御両親が訪ね面会できたこともあったという。面会を終え駅ホームに向かう僅かの、そしてもう最後というその時、その階段と地下通路を御家族はどんな思いを抱え、嗚咽を息子のために押し隠し一足一足を歩まれたのか、この地点に私達も立ったことを私と両親は胸に刻んだ。だからこの歌は、私が、語として音を選んだけれども同じく父母の胸に鳴った声でもあった。

その太刀洗平和記念館（旧駅舎）を訪れる際、父の運転する車はカーナビ音声の「目的地周辺」を聞き立往生するのだが、ただ目の前に広々と青い波の麦畑が

広がっていた。その少し途方にくれたような、それでいて麦を渡る風のような静寂を今も覚えている。後に知るのだが、太刀洗飛行場も、昭和二十年三月に空襲に遭い、多くの民間人、小学生や動員学徒、朝鮮人を含む尊い命が犠牲となっていたのだ。

最近偶然に知ったのだが、当時大分師範の生徒で、後に別府の戦前戦後を記録した小説家となる小郷穆^{おごうしず}子は、太刀洗航空機工場に学徒動員に行っていたという。戦後混血児救済に奔走した小郷虎市、小福夫妻の長女でもあり、栄光園の園長にもなった人である。

小福は、敗戦の日の虎市の言葉を日記に記している。「こんなに晴れていいのかなあ。死んでいった者の悲しみが、凝り固まって、矢玉となって降るべきじゃないのかなあ。天地にも怒りというものがあってもいいのになあ」。

——ここに歌があると思えてならない。

たまプラーザキャンパスに、倭万智が来る。

佐藤博之

私の短歌との最初の接点は、大学主催のこの講演会の告知でした。中学に上がるか上がらないかの頃に『サラダ記念日』が流行した、と聞いたことはあるものの未読。文学部に所属しながら『サラダ記念日』だけでなく、小説や漢詩以外の文学作品をきちんと読んでいたとありませんでした。それまでテレビで見える様な有名な人を生で見たことがほとんどなく、完全にミーハーな気持ちのままですぐ学生課に申込書を取りに行きました。

ミーハーな気持ちのまま申込書を提出したのはいい

ものの、さすがに予備知識が全くないまま講演会を聴いても身にならないしそもそも倭さんに失礼かと、申し込んだ足で大学生協で『サラダ記念日』と岩波新書『短歌をよむ』を購入しました。『短歌をよむ』で『萬葉集』大伯皇女の歌を解釈した上で「五七五七七というかたちがあったからこそ、大伯皇女は悲しみを表現できたのではないか、とも思う」との実例を示した上での解説文に、確かに!!と激しい感銘を受けてぐいぐいと読み進みました。『短歌をよむ』ではその他にも実際の古今の短歌作品から短歌の面白さやテクニクを分かりやすく、また読みやすい文体で書かれてあり、読み進めるままどんどん短歌への興味が深まりました。そしてその読書熱のままに『サラダ記念日』の他にも、『二握の砂・悲しき玩具』『寺山修司青春歌集』『古今和歌集』と手当たり次第に歌集を求めて貪り読みました。

講演会は夏の光が力強く射し込むたまプラーザキャンパスの一番大きな大教室で開催されました。『短歌をよむ』に書かれた内容と重なる部分には、あの名著を書いた方の肉声でまた聴けることが、ありがたさ以上に不思議な気持ちになりました。講演の最後に倭さんより、この講演を契機に短歌を始める人が一人でも増えてくれたら嬉しいと話されました。ああ、僕も短歌を詠んでいいのか、と不思議な気持ちで覚悟が固まり、それから小さな手帖を持ち歩きながら、拙い歌を詠み始める様になりました。

残照の静けさ。木ずれ、波の音。三笠が闇を吸ひて膨らむ
「國學院短歌」一〇七号

小田原の北原白秋——「木兔の家」^{みづく いへ}

山本登志枝

北原白秋は大正七年三十三歳の三月、二人目の妻章子とともに本郷動坂より小田原町十字町お花畑の借家に転居した。章子が胸を患っていたのでその療養をかね、気候の温暖な小田原を選んだのだという。その年の十月には十字町天神山の傳肇寺^{でんじょうじ}の一室に転居をする。歌集『桐の花』、詩集『邪宗門』『思ひ出』と刊行し歌人として、詩人としてのホープであった白秋は、人妻との姦通事件で失脚し、三浦三崎、小笠原、葛飾真間、小岩と転居を重ねる。その間、姦通事件の相手の俊子を妻にしたが小笠原から戻った後別れることになる。詩人としての生き方しかなかった白秋は章子とともに赤貧の日々を送っていたが、この傳肇寺に住んでは徐々に生活も安定してきた。大正九年には章子とも離別することになる。十年には佐藤菊子と結婚。翌十一年には長男隆太郎、十四年には長女篁子が誕生した。関東大震災に罹災したが、ようやく家庭も生活も安定し、十五年五月、谷中天王寺に転居するまでの小田原の八年間に白秋は国民詩人として世にきこえるようになった。

白秋は大正七年七月の鈴木三重吉創刊「赤い鳥」によって新しい童謡の制作や児童自由詩運動に携わるようになった。『北原白秋—歌とこころ』（有斐閣新書、一九八〇年）に、田谷銳は「白秋は同誌の童謡欄を担当することになり、その誌上に自作（童謡）を発表したが、その天真の本性と合致した童謡への創作衝動がこれにより眼を覚ます結果になった。」と語っている。長編散文詩『雀の生活』の執筆刊行、訳童謡集『まざあ・ぐうす』の刊行もした。小田原時代の最初の三年間は短歌とは離れていたが、歌集『雀の卵』の推敲、整理はしていて、

十年に刊行した。「大序」に校正の終わった日の身边を

窓から見てみると裏の小竹林には鮮緑色の日光が光りそよいでゐる、丘の松には蟬が鳴いて、あたりの草むらにも草蟬が鳴きしきつてゐる。南のバルコンに出て見ると、海がよい藍色をしてゐる。寺内の栗やかやの木や孟宗の涼しい風の上を燕が飛び翔つてゐる。雀も庭の枇杷の木の上で何かしてゐる。瀬の音もするやうだが、向ふの松風の下から浮々した笛や太鼓の囃子がきこえる。今日は孟蘭盆の十四日である。

と記している。傳肇寺での生活がうかがわれる文章だ。

傳肇寺に移った翌年には、傳肇寺東側の竹林に藁屋根、藁壁のその姿が木兔の顔に似ていると名付けた「木兔の家」と方丈風の書齋を建て、その翌年には三階建ての山荘も建てた。初めてで、最後の自分で建てた家とのことだ。その地鎮祭のとき事件が起こり章子との離別という、また十二年九月一日には関東大震災に遭い、その後半壊した家に住むことになるという試練はあったが、温暖な穏やかな気候、経済的に安定してきた生活が本来の白秋の童心、詩心をより深めたようだ。「赤い鳥小鳥」「雨」「砂山」「落葉松」「かやの木山の」「ベチカ」「かたちちの花」と今も日本人の心に残る童謡、詩が、また劇中歌「さすらひの唄」「煙草のめのめ」と当時巷で唄われた唄が生まれた、小田原の八年間は充実した白秋の壮年期だったといえる。

童謡について白秋は「童謡私観」（童謡論集『緑の触角』）に「私の童謡は幼年時代の、私自身の体験から得たものが多い。」とこの郷愁

編集 後記

まだ暑さの残る九月二十七日(土)に研究会を開催いたしました。会員でもある松平盟子さんに講演をお願いしました。与謝野晶子四十代の仕事を中心にしたお話は、コロナの時代を経験した私たちにとって身近に感じられる時代背景とともに、どのように晶子がその時代を生き抜こうとしたかを理解し、考えさせられた貴重な時間でした。当日参加できなかった方々にもお届けできるように全体を構成しています。最後に松平さんに丁寧な校正をしていただきました。

前回から始めました essay は、山

本登志枝さんに小田原時代の北原白秋について書いていただきました。小田原の地を実際めぐって書かれた文章は、白秋の息づきとともに深く味わうことができます。

今年より総会を三月開催とし、歌会は「春の歌会」「秋の歌会」に名称を変更しました。三月の会場は横浜市開港記念会館。歌会は会員外の方々にも参加していただきました。今後さらに充実した歌会になるようにと考えています。また、福島泰樹さんのミニ朗読会もありました。天井へと曲線をもつ歴史的建造物では母胎のなかで聴いているような柔ら

かな響きに包まれました。報告は、長崎厚子さん、高橋律子さん、中村則子さんです。

新会員の西村曜さん、小河内仁美さん、佐藤博之さんに「短歌との出会い」というテーマで書いていただきました。文章の瑞々しい太さとは、自分を見つめる強さでもあることを感じさせられます。

さらに新たな会員の方々が入会されました。一人一人が自分の言葉の確かさをじっくりと深め育てることができるような場でありたいと思っています。短歌の、そして韻文の言葉は容易くなく、その意味を考え続

けることで、短歌の世界は本来の豊かさに気づき始めるのだらうと思います。

今年も大さん橋には豪華客船が来航しました。その背景のもと、山下公園の鳩の、赤い足を見つめ歩く姿は愛らしい光景です。ここ横浜から言葉をお届けいたします。[M・T]

*

*

●会報第一二五号訂正

佐藤よしみさんがご執筆の「町の匂い」、四ページ二段目十四行目「もんじゃ焼き」は「もんじ焼き」の誤りです。お詫び申し上げます。

横浜歌人会会報第一二八号

発行日 二〇二五年十二月二十四日

編集人 高橋みずほ

発行人 桜井 健司

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

制作 アトリエ云 <http://a-un.art.coocan.jp/>

印刷 啓文社 <https://www.keibunsyaco.jp/>

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。